

## 白隠慧鶴『施行歌』研究序説

小野恭靖

大阪教育大学国語国文学教室

(平成五年八月三十一日)

近世(江戸時代)民謡の最大の特徴は、その教訓的内容にあると言つてよい。それらのうちの多くは、児童向けに親への孝を説いた歌謡で占められる。このような内容の歌は一般的には儒教的道徳によるものと受け取られるが、実はこの時期には禅宗を中心とした仏教や心学の立場から創作されたものが圧倒的に多い。本稿では近世民謡へのひとつのアプローチとして、江戸時代中期の禅僧で臨済宗中興の祖とも仰がれる白隠慧鶴作の和讃『施行歌』をとりあげる。まず、その基礎的研究として諸本を調査した結果、全体を四つの系統に分類できることが判明した。そこで各系統ごとに本文を掲出し、比較検討を試みた。

キーワード：白隠、『施行歌』、近世民謡、諸本、教訓

はじめに

江戸時代中期を代表する禅僧である白隠慧鶴(貞享二年(一六八八)〜明和五年(一七六八))は、駿河国の原に生を享けた。十五

歳で得度出家の後、諸国行脚を経て郷里に戻り、松蔭寺の住持となる。修行の傍ら、多くの著作や絵画、さらに説教等によって広く日本全国の民衆の教化に努め、臨済宗中興の祖としても名高い。白隠の真骨頂は何と言つても、終生地方の小寺院に暮らし、農民らに慕われたという庶民的な人間性に求められるが、著作の多くも、農民を中心とする庶民向けの意図が濃厚に認められる。

本稿で考察対象としてとりあげる『施行歌』も、白隠の庶民向けの著作のひとつとされる教訓的な和讃である。この書は『国書総目録』、『古典籍総合目録』等に「せぎょうか」(傍点筆者、以下同様)として登録され、これが一般的な読みとなっている。しかし、その板本によれば旧仮名遣いながら「せぎやううた」とルビが付されておき、これに従うべきであろう。

以下、本稿では『施行歌』について、その研究の第一歩として本文系統の調査を中心にしていくつかの新知見を述べていくこととする。

## 一 『施行歌』に関する先行研究

『施行歌』に関する先行研究はきわめて零細である。管見に入つたものの中では、次に掲出する多屋頼俊『和讃史概説』三二六頁の一節が、日本仏教歌謡史の中に本書（『施行歌』のこと、以下同様）を位置付け、光彩を放っている。

孝行和讃と同じ様なものに「善悪種時和讃」「白隠施行和讃」等がある。善悪種時和讃（善悪種時鑑和讃とも云ふ）は善因善果悪因悪果の理を説いたもので、思想の根柢は仏教にあるが、儒教や神道を取り入れて居る。白隠施行和讃はこの和讃と内容に於いても語詞に於いても緊密な関係がある。即ち「利口で富貴になるならば、鈍なる人はみな貧か。」「種もの惜んで蒔かずして、穀物とりたる例なし、田畑に五穀をまかずして、自然と生たる例なし、種物一升まきおけば、五升や一斗は実のるべし、しからは少しの施も、果報は倍とあることぞ」と云ふ如きを初め両和讃に共通の語句が少くない。善悪種時和讃は頗る長編で五百余句であり、白隠施行和讃は百二十句であるが、両和讃は単に広略の相違に過ぎないと思ふ。此等は何れも童幼等に暗誦せしめ、以つて此を善導せんが為に作り出されたものである。右記の外にも類似的和讃は少くないが、今は省略しておく。

この『施行歌』と『善悪種時鑑（鏡）和讃』の内容的類似的指摘は鋭いと言える。なお、多屋は『施行歌』を「百二十句」としているが、これは後述する諸本系統の中の（Ⅲ類）本に拠つたものである。続いて武石彰夫は「近世和讃の特色の一つは、民衆教化用として教訓性を色こく持つたことである。」「孝行和讃」「善悪種時和讃」「白隠施行和讃」などのいわゆる教訓ものが多く見られ：」（『仏教和讃御詠歌全集』上巻所収「和讃御詠歌概説——その歴史とところ——」

## 三七頁）と記す。

歌謡史的見地からの『施行歌』への言及は以上の二点に尽きるが、白隠研究の側からの簡単な説明程度の言及は数多い。次にその代表的なものを列挙する。

※本書は、白隠禪師が、因果の理を以て、人に物を施すべきを勧めたる歌なり（『日本教育文庫』宗教篇所収『施行歌』解題）

※白隠和尚今より凡そ二百余年前に出世し給ひし禪門の大宗匠なるが人をして施行の念を惹起せしめんとて童幼野嬬にも分り易き此施行歌をもし給へり、凡そ人間の慈善てふ中に其功德の施行に過ぎたるはなかるべし、されば仏も布施をもて六度の第一に置き給へるなれ今や世の開け行くまゝに慈善のこと言痛くあげつらはるやうになりぬ、あはれ世の慈善の心あつき人達よ、此謡を広く世上に施して童蒙にも施行の心を起さしめて善縁を結ぶ一助となし給へかし、現在の福田此上やなからん、穴賢（河村泰太郎『追善之葉』所収『施行歌』はしがき）

※白隠和尚晩年、施行の功德を説き、松蔭にて上梓し、弘く世に施したるものなり。思ふに駿豆の凶歳の時か（『白隠和尚全集』第一巻所収『施行歌』解説）

※施行とは慈善をいふ、本篇は師が諸人に施行を勧め、窮民を救ふの一助となさんために作られしものにして其の辞卑近なるも、仏教の三世因果の道徳を具体的に説明し、此の道理に依りて慈善は却て我身に返り来るものなることをうたひ、愚民開導の一方便に供したるもの（宮裡祖泰『白隠禪師法語集』所収『施行歌』頭註）

※此の歌は施行の貴き所以と、世間一切が因果応報の理によつて、示現するものなることを、通俗に説いた和讃である。是

れこそ一般の人に理解出来る様に作られてある。白隠の仮名物が民間教化の爲めのものだと云ふ点から云へば、此の和讃などは、其通りであつて是れなどは其代表的のものとなつてよい。僧俗共に愛誦してよい和讃である（陸川堆雲『考証白隠和尚詳伝』第七章第二節所収「施行歌」略解説）

※饑人貧者に施与せんことを諭せる短歌数首を掲ぐ。天保八年丁酉（二四九七）円通翁の補刻を再版施本したるものなり（『国書解題』所収「白隠和尚荒年施行歌」の項）

以上、「施行歌」の内容についての記述は大同小異と言えようが、ここで注意されるのは、末尾に掲げた「国書解題」に本書を「白隠和尚荒年施行歌」との表題で掲げ、さらに「天保八年」の「円通翁の補刻」をもとに「再版」した旨記す点である。ここから得られる本書の書誌的情報は、先掲の多屋頼俊による「百二十句」本の存在を指摘する情報と並んで、きわめて重要なものと考ええる。次に本書の諸本について整理しておくこととする。

## 二 「施行歌」の諸本整理

今日まで直接管見に入つた「施行歌」諸本は、写真によつて全内容を知り得たものを含めて、合計二十六本にのぼる。さらに、未見ながら、その存在を知り得るものが、十本あり、このうち四本は外題や刊記等の情報からおおよその本文内容を知り得る。以上の諸本を通覧した結果、本文内容によつて大きく四系統に分類することが可能であることが判明した。以下、四系統を私に「Ⅰ類」「Ⅱ類」「Ⅲ類」「Ⅳ類」とし、さらにそれぞれの系統の中でも特に密接な関係を有する本を、甲・乙・丙……のグループにまとめて掲げる。それぞれの系統やグループの本文特徴については第三―十六章で述べる。

なお、末尾の△は未見の本であることを示す。

### 〔Ⅰ類〕

甲①駒沢大学一八〇―二六七本（外題「白隠禪師施行歌 全」、寛政四年春京都銭屋利兵衛・梅村伊兵衛刊、一冊）

②松ヶ岡文庫八七七八本（外題「白隠禪師施行歌 全」、寛政四年春京都銭屋利兵衛・梅村伊兵衛刊、一冊）……甲

①と同版本

③雲泉文庫A本（『雲泉莊山誌』卷之三「石門心学関係圖書及資料」六九頁によれば、外題「白隠禪師施行歌」、寛政四年刊、一冊）△……甲①②と同版本か

④松ヶ岡文庫八八〇八本（表紙を欠くため外題なし、内題は甲①②と同版で「白隠禪師施行歌 全」、文政十年正月伊勢松坂野田栄昌刊、一冊）

⑤駒沢大学一八〇―二三二本（外題「白隠禪師施行歌 全」、天保四年冬京めときや宗八刊、一冊）

⑥架蔵A本（外題「白隠禪師施行歌 全」、刊年等不明、一冊）

⑦龍谷大学本（外題「白隠禪師施行歌」、明治十四年九月豊治良転写本、原本の刊年等不明、「死出山独案内」「仏説因果経和讃」と合冊一冊本）

乙①架蔵C本（表紙題簽落剥のため外題不明、文久元年卯月思明舎刊、一冊）

②無窮会神習文庫本（『国書総目録』第五卷一三九頁「施行歌」の項によれば、文久元年刊）△……乙①と同版本か

③雲泉文庫B本（『雲泉莊山誌』卷之三「石門心学関係圖書及資料」六〇頁によれば、外題「白隠禪師施行歌」、文久

元年思明舎刊、一冊) △……乙①②と同版本か

丙①東京大学本(外題「施行歌」、天保十三年五月刊、「孝行和讃」「因果和讃」「ホコリタ、キ」と合冊一冊本)

②佐賀大学小城鍋島文庫本(外題「施行歌」、天保十三年五月刊、「孝行和讃」「因果和讃」「ホコリタ、キ」と合冊一冊本)……丙①と同版本

③京都大学本(外題「施行歌」、弘化元年京都西邑刊、「孝行和讃」「因果和讃」「ホコリタ、キ」と合冊一冊本)

丁・「思文閣古書資料目録」第三百三十一号(平成4年9月)掲載本(冒頭表題「白隠禪師施行歌」、刊年等不明、木版一枚物)

戊・架蔵D本(冒頭の表題は「白隠禪師施行歌」(但し当該本文の小題は「長者になる伝」)、明治期刊か、他に「びねもち」「せりあい問答」と「養蚕子もり謡・住居子もり謡」とで一部を成す、扇面銅版一枚物)

〔Ⅱ類〕

甲①駒沢大学一八〇―一三〇五本(外題「白隠和尚荒年施行歌」、天保二年正月鶴岡三日町丁子屋門吉刊(但し原本は江戸白木屋刊)、一冊)

②松ヶ岡文庫ハ七八二本(外題「白隠和尚荒年施行歌」(後補手写)、刊年等不明、一冊)

③『国書解題』掲出本(同書一六二七頁によれば、外題「白隠和尚荒年施行歌」、天保八年刊の再版本、一冊) △

④国会図書館本(外題「善悪種蒔鏡」(但し当該本文の冒頭小題は「白隠和尚荒年施行歌」) >、転写本、原本の刊年等不明、「善悪種蒔鏡」「施行勸進弁」「飢饉せざる心得書」「救荒雑食集」「食物口伝」「田粗録」

と合冊一冊本)

⑤宮内庁書陵部蔵『片玉集』卷十四所収本(外題「白隠和尚荒年施行歌」、転写本、原本の刊年等不明)

乙・駒沢大学忽滑谷文庫一〇二本(外題「心要善悪種蒔鏡和讃 全」(但し当該本文の冒頭表題は「一休大禪師施行歌」) >、江戸須原屋茂兵衛以下合計十二書肆の刊、文政頃か、「沢庵和尚法語」「閑通和尚法語」「教訓百首」と合冊一冊本)

丙・玉川大学A本(外題「白隠和尚施行歌」、文化四年十二月別所大湯薬師堂梅点刊、一冊)

〔Ⅲ類〕

甲①駒沢大学一八〇―一三一一本(外題「白隠和尚施行歌 全」、天明四年二月下旬刊、一冊)

②駒沢大学一八〇―二五五本(外題「白隠和尚施行歌施印」、文化九年霜月松川某刊、一冊)

③東京都立中央図書館加賀文庫本(外題「白隠和尚施行歌施印」、文政五年仲秋直後頃大坂糸川成富刊、一冊)

④大和文華館鈴鹿文庫本(外題「白隠和尚施行歌 全」(後補か)、文政五年仲秋直後頃大坂糸川成富刊、一冊)……甲③と同版本

⑤三原図書館植崎文庫本(外題「白隠和尚施行歌 全」、天保十五年三月下旬刊、一冊)

⑥架蔵B本(外題「白隠和尚施行歌 全」、天保十五年三月下旬刊、一冊)……甲⑤と同版本

乙・松ヶ岡文庫ハ一一〇七本(冒頭表題「白隠和尚施行歌施印」、刊年等不明、木版一枚物)

## 〔IV類〕

甲・玉川大学B本（外題「施行歌」、安政五年夏京都桜井匠直刊、「孝行和讃」「因果和讃」「ほこりたたき」と合冊一冊本）

## 〔不明〕

- ① 凌霄文庫本（『国書総目録』第五卷一三九頁「施行歌」の項によれば、外題「増補施行歌」、文化四年写本）△
- ② 早稲田大学本（外題「心学道歌」〈但し当該本文の冒頭表題は「施行歌」〉、刊年等不明、「福来進」「ほこりたたき」「大道ちよぼくれ」「毎月修百万遍仏願大功德日」と合冊一冊本）△
- ③ 松蔭寺本（一切不明、但し昭和六十三年二月松蔭寺発行活字本「安心ほこりたたき 施行歌」〈施主川口五郎氏〉が、この本を底本にしているならば〔I類〕に属することとなる）△
- ④ 日吉宗雄氏本（沼津市歴史民俗資料館発行『白隠とその時代』〈昭和五十八年五月〉によれば、この本は「施行歌」他とされるので、「ほこりたたき」等との合冊一冊本の可能性がある。これが刊本であるならば〔I類〕丙、もしくは〔IV類〕であろう）△
- ⑤ 河村本（『新禅籍目録』一三〇頁「白隠施行歌」トの項によれば、天保七年刊）△……天保七年刊本は他に管見に入らないが、『国書総目録』第五卷一三九頁「施行歌」の項に掲載されながら、現在行方不明で閲覧不能な名古屋市鶴舞中央図書館本も、天保七年刊本とされる。両者は同版本であろう。
- ⑥ 『白隠施行歌絵抄』（『享保大阪出版書籍目録』によれば、

著者は野田村の玉川雲起、天明八年二月に出版許可を出願、『新禅籍目録』一三〇頁「白隠施行歌絵抄」の項によれば、天明八年跋、大阪播磨屋九兵衛刊、一冊）△

## 三 〔I類〕系諸本について

前章において私に〔I類〕とした諸本に共通する特徴は、本文が一、二六句（乙、戊は一、二七句）から構成されることである。外題は、「白隠禅師・施行歌」（傍点筆者、以下同様）で、他作品と合冊の丙では単に「施行歌」とする。次に本文の翻刻を掲げておく。翻刻に際しては甲①を底本とする。本文は通行字体に改め、紙数の都合上、奇数句を上段に偶数句を下段に置く二段組とした。また、漢字の宛て方やルビは底本のままとした。〔I類〕の他のグループで異なるある句には頭に※を付し、末尾に本文を掲げた。

## 〔本文翻刻〕

今生富貴する人は  
今生施しせぬ人は  
利口で富貴がなるならば  
利口で貧乏するを見よ  
未来は此世のたね次第  
蒔種大小あるゆへぞ  
よい種あらんでまきたまへ  
穀物取たる例なし  
麦ひへ取たるためしなし  
五升や壺斗はみのるぞや

前世に蒔をく種がある  
未来はきわめて貧なるぞ  
純なる人はみな貧か  
此世は前世の種次第  
富貴に大小ある事は  
この世はわづかの物なれば  
たねを惜みてうへざれば  
田畑に麦稗蒔ずして  
むぎひへ壺斗まきをけば  
然れば少しの施しも

果報は倍々あるものぞ  
 くわほうも多しと斗りしれ  
 施せよとす、めたり  
 救ふこゝろを發すべし  
 有は有ほどたらぬもの  
 持子が持ねば持ぬもの  
 持子はあつはれ持ものぞ  
 人を倒さず施行せよ  
 我子にゆづりて怨となる  
 ゆづる我子に沈みきる  
 筆の非道をし給ふな  
 あまり非道な利をとるな  
 其身は三途に落入て  
 非道は子孫の害と成  
 世間に数く有物ぞ  
 親が悪事をせぬゆへぞ  
 ますく重恩思ひしれ  
 荒ひ風をも厭ひしぞ  
 親を思はぬおろかさよ  
 鳶や鳥に劣りたり  
 惜むたからはなき物ぞ  
 其金出して施行せよ  
 是に勝れる善事なし  
 死んで身につく物はなし  
 捨て冥途の旅立ぞ  
 耳もきこへず目も見えず  
 闇をやみぢに入事ぞ

況や施し多ければ  
 それゆへお釈迦も観音も  
 さすれば乞食非人まで  
 おのく富貴で持たから  
 おほくの宝をゆづるとも  
 少しも田畑ゆづらねど  
 我子の繁昌祈るなら  
 人をたをしてもつたから  
 人の恨のかゝるもの  
 秤や秤や算盤や  
 常々商ひする人も  
 死んで三途に入事ぞ  
 屋敷は草木が生蕃る  
 親の悪事が身に酬ふ  
 一門繁昌する事は  
 若又親にはなれなば  
 子を慈しむ親こゝろ  
 それ程親に思はれて  
 おやに不孝な人ぐは  
 娘むす子をしつけるに  
 親の後生の為ならば  
 飢死ぬ人を助けなば  
 たとひ万貫長者でも  
 妻も子供も錢金も  
 冥途の旅立する時は  
 行衛しらずに門をいで  
 其時後悔限りなし

兎角命のあるかぎり  
 命は脆きものなれば  
 今宵頭痛が仕初めて  
 強い自慢をする人も  
 けふは他人を葬れし  
 然れば頼みなき娑婆に  
 ふうきさいわひある人は  
 貧者に施しせぬ人は  
 狗でも口はすぐるぞや  
 慈悲善根は其俤に  
 慈悲善根をする人は  
 天魔外道はより付ず  
 よくく丁簡せらるべし  
 余りどうよく日にあまる  
 暮すこゝろは鬼神か  
 子孫はんじやう長からじ  
 施行で借錢し初めよ  
 上たる人をはじめとし  
 われもくと共ぐに  
 貧者の命救ふなら  
 平生貧者に敬はれ  
 人の喰物すつるのを  
 前世に蒔種たらぬゆへ  
 かゝる有様見ながらも  
 ともに角にも人として  
 此節信心起らねば

善提の種をうへたまへ  
 露の命と名つけたり  
 九死一生なるもあり  
 暮に頓死をするもあり  
 明日は我身の葬れぞ  
 金銀畜へ何にする  
 貧者に施しせらるべし  
 富貴でくらすかひもなし  
 飢人貧者を助くべし  
 家繁栄の御祈禱ぞ  
 神や仏に守られて  
 然れば祈禱になるまいか  
 恵施しならぬとは  
 飢死ぬ貧者を見ぬ振に  
 慈悲善根のなき人は  
 宝は余りはなき物ぞ  
 それこそ真の信心よ  
 頭立たる人ぐは  
 厚く施行に身を入れよ  
 広大無辺の善事也  
 身に付果報有まいか  
 好んで拾ふてくう物は  
 是非なく袖乞する事ぞ  
 をのく仁心起らぬか  
 信心なければ人でなし  
 全牛馬にことならず

※1 ふうきはこの世のたね次第(丁)

- ※ 2 よいたね撰んで植たまへ(乙)
- ※ 3 よひ種ゑらんで植給へ(戊)
- ※ 3 種を借みて植ずして(乙)
- ※ 4 たねを借みて植ずして(戊)
- ※ 4 田畑に麦稗蒔ざれば(乙)
- ※ 4 田畑に稗蒔ざれば(戊)
- ※ 5 麦稗とるべき様もなし(乙)
- ※ 5 麦ひえ取べき様もなし(戊)
- ※ 6 むぎひへ少々まきおけは(丙)
- ※ 6 施しせよとはす、めたり(乙)
- ※ 7 善しをせよとす、めたり(丁)
- ※ 8 さすれば貧者人まで(戊)
- ※ 9 持子が持ねは持ぬなり(乙)
- ※ 10 人の恨みをうけぬれば(乙)
- ※ 11 人のうらみをうけぬれば(戊)
- ※ 11 ゆづる我子の浮沈み(乙)
- ※ 12 ゆづる我子のうき沈み(戊)
- ※ 12 筆の非道をすべからず(乙)
- ※ 13 屋敷は草木が生蕃り(乙)
- ※ 14 親の因果が身に酬ひ(乙)
- ※ 15 この次に、子孫断絶する家は、の一句が挿入される(乙)
- (戊)
- ※ 16 若その親にはなれなば(乙)
- ※ 17 若其親にはなれなば(戊)
- ※ 17 鳩や鳥に劣りたり(乙)
- ※ 18 可愛き我子をしつけるに(乙)
- ※ 19 これに勝れる功德なし(乙)
- (戊)
- ※ 20 それ程すぐれた善事なし(丁)
- ※ 20 是に勝れる功とくなし(戊)
- ※ 20 たとへ万貫長者ても(戊)
- ※ 21 妻も子も銭も金も(戊)
- ※ 22 行衛もしらずたどり出(乙)
- ※ 23 行方もしらずたとりいで(戊)
- ※ 24 くらきやみちに入事ぞ(乙)
- ※ 24 くらきや道に在る事ぞ(戊)
- ※ 25 兎に角命のある限り(乙)
- ※ 25 兎に角命の有かぎり(戊)
- ※ 25 菩提の種をうゑつべし(乙)
- ※ 26 菩提の種を植つべし(戊)
- ※ 26 明日は我身葬札ぞ(戊)
- ※ 27 然れば頼みのなき娑婆に(乙)
- ※ 28 然れば頼のなき娑婆ぞ(戊)
- ※ 29 金銀借みて何にする(乙)
- ※ 29 幸富貴あるひとは(乙)
- ※ 30 財宝ふうきある人は(戊)
- ※ 30 狗でも恩義は知るぞかし(乙)
- ※ 31 狗でも恩儀はしるぞかし(戊)
- ※ 31 恩知る貧者を助くべし(乙)
- ※ 32 恩知る貧者を助くべし(戊)
- ※ 32 家繁栄の祈禱なり(乙)
- ※ 33 家繁栄の祈禱也(戊)
- ※ 34 天魔外道もより付ず(乙)
- ※ 35 飢死ぬ貧者を見ぬ振で(乙)
- ※ 35 暮す心は鬼か蛇か(乙)
- (戊)

- 暮すこ、ろは鬼か蛇か (戊)
- ※ 36 宝に飽事なき物ぞ (乙) (戊)  
宝に余りはなき物ぞ (丙)
- ※ 37 飽なき宝で施行せよ (乙) (戊)
- ※ 38 それこそ真の信心ぞ (乙) (戊)
- ※ 39 上下貴賤の隔なく (乙)
- 上下貴賤のへたてなく (戊)
- ※ 40 頭立たる人々は (乙) (戊)  
頭だちたる人々は (丙)
- ※ 41 貧者の命を救ふこそ (乙) (戊)
- ※ 42 身に付果報は有まいか (乙) (戊)
- ※ 43 以下四句、是非なく袖乞するものは、前世に蒔種たらぬゆへ、人のすてたる喰物を、已事不得してくふ事ぞ、と作る (乙) (戊)
- ※ 44 おのく不便は起らぬか (丙)
- ※ 45 仁心なければ人ぞなし (乙) (丙) (戊)
- ※ 46 此節仁心おこらねば (乙) (丙) (戊)  
此節仁心起らねば (丙) (戊)

右に掲げた一二六句からなる本文は、「I類」の甲、丙、丁に共通し、相互に密接なかわりを有する。管見によれば、甲がもととなつて、丙や丁が後に刷られたものと思われる。また、校異からも明らかのように、一二七句の乙と戊は互いに関係が深い。戊は明治期刊と思われる銅版刷であるから、乙をもとにしたと考えてよいであろう。そこで、甲と乙とを比較してみると、後者の本文は前者より合理的な構成をとっており、後の改変を思わせる。実際に、甲は寛政四年（一七九二）の初版本と思われる①②とその版を流用した

⑤⑥で、秋里湘夕（籬鳥）の寛政三年十二月の序文を持つものに対し、乙はずっと後の文久元年（一八六一）四月の思明舎なる心学の徒の序文を持つ。「I類」においては甲の本文が古い由緒を持ち、管見に入つた伝本の数からも、もつとも広く読者を得たことが推測される。そして、この「I類」甲の本文こそが、現在に至るまでもっとも一般的に白隠の「施行歌」として紹介されているものに他ならない。ちなみに白隠著作の基本文献である『白隠和尚全集』第六（昭和九年、竜吟社版）の他、『白隠禪師仮名律』（明治十七年）、『禅門法語全集』第六卷（明治二十九年）、『白隠和尚全集』（明治三十一年、光融館本）、『日本教育文庫』宗教篇（明治四十四年）、『白隠禪師の言行』（大正四年）、『道善之葉』下冊（大正六年）、『校補禅門法語集』中（大正十年）、『白隠禪師法語録』（大正十一年）、『白隠禪師とその語録』（昭和三年）、『高僧名著全集』第十二卷（昭和五年）、『白隠禪師法語集』（昭和十七年）、『白隠民衆の書画の写真集』（昭和二十二年）、『白隠』（白隠禪師遺徳顕彰会編、昭和四十三年）、『松蔭寺発行活字本「安心ほこりたた記施行歌」（昭和六十三年）等、ほとんどの活字本が「I類」甲の本文によっているのである。

次に、「I類」甲と戊それぞれの構成について述べたい。初めに甲の構成を①をもとに箇条書きにして左に掲出する。

(1) 表紙（色付き厚表紙、外題「白隠禪師施行歌 全」〈題簽〉）  
……〔写真I〕参照。

(2) 表紙見返し扉（右に富士山麓の庵に住する白隠と土地の人との交流を描く絵、中央に内題「白隠禪師施行歌全」、左に「駿州原の闍提尊師近曾此施行歌を作りて老少に誦せ國中の在郷をめぐらせ窮民を救ふ一助とし玉へば諸人此文に会得し豪



[写真II] 架蔵A本



[写真I] 架蔵A本



[写真IV] 架蔵A本



[写真III] 架蔵A本



【写真V】 架蔵A本

家をはじめ其分限相应に施行し貧困をすくひける今これを梓にして四方に弘め今世仁心にもとづく便ならん事をねがふのみ 平安書林 合梓) …… 【写真II】 参照

- (3) 序文 (「白隠禪師施行歌序 給孤長者は千金を施し祇園精舎を営み本朝不二乃山麓原の駅の白隠禪師は施行歌を作りて老少に諷はせ遠近より千金を施しめ窮民を救ふ年の豊凶人の貧福に循ふて施す人も受る人もみな善縁に融通し即仏の因となるしばらく専勝経によりて小乗の禪より大乘の禪に入しめんとの法語なりこれを月のゆふべ花のあしたに風流なる曲節に謳ひたまはゞ 布金の都に至らん事疑ひあるべからず 寛政三歳辛亥冬蠟月 籬寫 秋里湘夕 回回) )
- (4) 本文 (端作「白隠禪師施行歌」、前掲二二六句、途中画中詞を伴う三葉の絵入へ第一図「いつもの通り畔におはらひさまを立てしやつしやれ」「ことしはどふやら豊年らしい」、第

二図「此金子は親父がまさかの時に出しつかひ候へとお、せをかれし用心金にてござる」「やぶれしぬのかたびらは元祖がつねにきられてかせぎ玉ふかたみにて家の宝とぞんずる」、第三図「善根をする人のそばへ寄たら悪魔ども一々みぢんにしてくりやう」「のふこはやおそろしやにげよ〜」、末尾「闍提尊師施行歌終」) ……三葉の絵を順に掲げる。【写真III】 【写真IV】 【写真V】 参照

(5) 広告、刊記 (「遠羅天釜附続集法語之書」「右之書先年板行出来仕候御求メ御覽可被下候」、寛政四年壬子春発行 平安書林 寺町通四條上ル町 御幸町通三條上ル町 梅村伊兵衛) 錢屋利兵衛

右に掲出した部分のうち、(2)全体を欠く本が⑤で、末尾の「平安書林 合梓」を欠くのが④と⑦である。また、(3)全体を欠く本が④で、「寛政三歳」以下を欠くのが⑦である。但し、⑦は写本のため、書写した「豊治良」なる人物が省略に従った可能性も大きい。(5)は初版と思われる寛政四年刊本によったので、①②と未見ながら同版本らしき③以外はこれを持たない。④は末尾に「富貴長命は皆人の望所なれども其道を聞いて因を種る者まれに多す慳貪邪見に生涯を送り苦海に沈むは唯愚昧にして尊き法の道を聞ざるによる昔白隠禪師老婆心切に愚蒙の男女を憐み施行歌を作りて因果の理をさとし法の道しるべとなし末世の人に富貴長命の方を教へ玉ひし文今猶四方に伝へて利益の広多を随喜し又梓に彫て遠近の人に法施す 文政十年丁亥正月 妙有上人識 伊勢松坂 野田栄昌印施 神都米堂刀」という跋文と刊記を持つ。⑤は「仏鬼軍 全」「孝行和讃 全」「白隠禪師施行歌 全」「道歌砂の戯 全」の四種の本の広告と「天保四年巳冬 めときや宗八」なる刊記を有する。⑥⑦は(5)部分をまったく欠いている。なお、(4)に掲出したように刊本である①⑥はすべ



[写真VI] 架蔵C本

て同一の三葉の絵を本文中に持つ〔写真Ⅲ〕〔写真Ⅳ〕〔写真Ⅴ〕の順。  
 続けて乙の構成を甲と同様に掲出する。もとにした本は①架蔵C  
 本である。

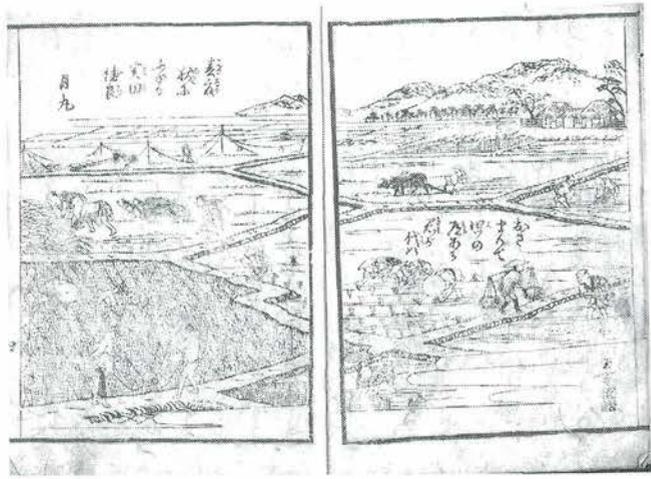
(1)表紙(甲と同様、色付きの厚表紙で袋綴とするが、題簽が落  
 剥しており外題不明)

(2)表紙見返し扉(左上から右下にかけて、富士山麓の庵に住す  
 る白隠と土地の人との交流を描く大きな絵、その右上には  
 「駿州原の關提尊師近曾飢饉のとし此施行歌を作りて老少に謳  
 せ國中の在郷を」、左下に続けて「めぐらせ窮民を救ふ一助  
 とし玉へは諸人此文に会得し豪家をはじめ其分限相应に施行  
 し貧困をすくひける今これを梓にして四方に弘め今世仁心に  
 もとづく便とす」、中央に内題「白隠禪師施行歌全」……

〔写真Ⅵ〕参照



[写真Ⅷ] 架蔵C本



[写真Ⅷ] 架蔵C本



[写真X] 架蔵C本



[写真IX] 架蔵C本

(3)序文「夫稻は命の根の約め言葉。米は世の根の略語なり。此故に種不作するときは。貧しき者は命の根を断。富家米を蓄へ困ふときは。窮民世に存ふの根を失ふて。飢死するの外なし。貞享の初め。凶作飢饉の事あり。駿州不二の山下。原の駅松蔭寺の大善知識白隠惠鶴禪師此鄙歌をつくりて。遠近の老若幼童に諷はせ富家の志しを起して。大に苦民の飢を救ひ玉ふ。されば年の豊凶人の貧富に循ふて。施す人も受る者も。皆善縁に融通し。即仏菩提の因を結ぶ。しばらく専勝経に依て。小乗の禪より。大乘の禪に入しめんとの方便なり。今猶これを花の旦。月の夕に。鄙びたる声して謳ひ。富家を誘ふものならば布金の都に至らん事。疑ふべからずと云々  
文久元辛酉卯月 思明舎誌 四四」

(4)本文(端作「白隠禪師施行歌」、一二七句、途中各一首の道歌を伴う四葉の絵入へ第一図「おさまりて四つの道ある君が代は春夏秋冬にふゆる実田佳良 月丸」、第二図「副登々幾須啼つる死出に入ぬればたゞ有明も常闇の空」、第三図「施しの米にはあらで一つかみに悪魔をひしぐ諸天善神 三五道人」、第四図「か、やかす着類道具の数々もこれや先祖の蔭に干らん 月曆」、末尾「思明舎施印 闍提尊者施行歌終」)……

四葉の絵を順に掲げる。〔写真VI〕 〔写真VII〕 〔写真VIII〕 〔写真IX〕 〔写真X〕 参照

〔写真VI〕を〔写真II〕と較べると、両者はたいへんよく似ていることがわかる。また、扉の詞もほぼ一致しているが、これは前述のように乙が甲に基づいていることを示している。(3)序文も後半は甲の秋里湘夕のものに完全に依拠している。(4)本文については前述した<sup>10)</sup>

次に丙は前述のように他作品との合冊本であり、「施行歌」につ



[写真ⅩⅦ] 架蔵D本



[写真ⅩⅠ] 『思文閣古書資料目録』掲載本

いても序跋等は一切持たない単純な形式を採る。一冊全体の構成を①東京大学本をもとに左に掲出しておく。

(1) 表紙(色付き厚表紙、外題)「孝行和讃 因果和讃 全」(題簽)

(2) 本文(各端作)「孝行和讃 宣契上人作」「因果和讃」

「施行歌 白隠禪師作」「ほこりた、き 白隠禪師作」

(3) 刊記(「天保十三壬寅五月 伊勢国引接寺沙門法龍敬刻」)

丙のうち③京都大学本は外題を「孝行和讃 施行歌 全」、本文

端作のうち「因果和讃」作者をまったくの空白とし、刊記を「弘化

元年 京極通西邑氏施刻」とする。

次に丁の構成についても触れる。丁は一枚物で甲、乙、丙とは大きな相違がある。写真が掲載された『思文閣古書資料目録』第三百三十一号(平成4年9月)によれば、縦三六種、横四九種とのことである。同資料は実見には及んでおらず、同目録掲載の写真によってその構成を左に掲出する。

(1) 冒頭表題(「白隠禪師施行歌 何某施印」)

(2) 本文(一二六句、途中に一葉の絵入り)……〔写真ⅩⅧ〕参照

(3) 跋文(「右尊師の歌を深く味ふべし譬ひ施し出来ぬ人とても

他人の施を見てともに……(写真不明瞭のため中略)……是

又広大無辺の善事は子孫長久の基なるべし」)

戊は丁と同様の一枚刷であるが、扇面の形状をしている。銅版刷で明治期のものと思われる。「施行歌」を全体の表題として、その本文には「長者になる伝」という小題を付して中央に置く。前に相当する右側には「びんぼう人せりあい問答」を、後に相当する左側の位置には「養蚕子もり謡・住居子もり謡」を据える。左に簡単な構成を掲げる。

(1) 冒頭表題(「白隠禪師施行歌」)

(2) 本文(各端作)「小題」(「びんぼう人せりあい問答」「長者になる

伝「養蚕子もり謡・住居子もり謡」、全体の本文の下にあたる部分に三葉の絵あり）……〔写真Ⅹ〕参照

以上、〔Ⅰ類〕の構成について述べてきた。〔Ⅰ類〕系諸本は、丙を除いて「白隠禪師施行歌」を主題に持つ点が特徴で、これも丙を除いて挿絵が付されている。また、序や跋を有するものも多い。本文的には甲、丙、丁の一二六句と乙、戊の一二七句があるが、関連がきわめて深く、後者は前者の改編によるものと考えられる。また、明治以来の活字本『施行歌』の大半が〔Ⅰ類〕甲の本文に依拠するものであり、いわば「施行歌」の主流に位置する本文を伝えていると言つてよい。さらに、乙は心学関係者による出版であり、この時期の心学思想が、手嶋堵庵が採用して以来の教訓歌謡の中に生き続けている点、きわめて興味深い。仏教と心学との接点を見出すことも可能である。

四 〔Ⅱ類〕系諸本について

第二章で私に〔Ⅱ類〕とした諸本は、基本的に〔Ⅰ類〕を増補した合計一五八句に七言絶句等を付加した本文を持つ点に最大の特徴がある。その代表的本文である甲①駒沢大学一八〇―一三〇五本を底本として左に掲出する。翻刻は前章の〔Ⅰ類〕と同様の凡例に従うこととする。

〔本文翻刻〕

千早振神の守は元より富貴  
運あふ身のまつしき者は  
今も昔も目出度御代は  
いてや御倉を打明くれて

人の心のひかむか飢饉  
いか、するやとおもへは傷  
民の糧をば貯へおかせ  
君のおかけて露命をつなく

かゝる時こそ有かたかりき  
智ある御方の仁恕をかりて  
今生富貴をする人は  
今生に施しせぬ人は  
利根で富貴か成ならは  
鈍で富貴をする中に  
此世は前世の種次第  
施行に大小あるゆへぞ  
非道に大小あるゆへぞ  
盛衰ふたつに蒔わかる  
よき種おさめて植給へ  
穀物取たるためしなし  
麦種はへたるためしなし  
五升や一斗は実のるそや  
果報は倍々有ものそ  
果報も多しと量しれ  
施せよとはす、めたり  
由ある事とおもふべし  
救ふ心を起すへし  
あれは有ほとたらぬもの  
有てあかくは浅ましや  
持子か持ねはもたぬもの  
持子は天晴もつもあり  
有高売切る者もあり  
親の望にゆくものか  
人を倒さず施行せよ  
吾子にゆつりて仇となる

年の吉凶出来ふでき  
右や左の長者を頼む  
前世に蒔おく種があり  
来世はきはめて貧窮そ  
鈍なる人はみなひんか  
利根で貧乏するを見よ  
富貴に大小ある事は  
貧者に大小ある事は  
善悪ふたつに蒔種は  
此世はわつかの物なれば  
種物おしんで蒔すして  
田畑に麦種まかずして  
麦種一升蒔おかは  
しかれば少しの施しも  
いわんや施し多ければ  
夫ゆへ釈迦も観音も  
仏も菩薩も勧しは  
さすれば今年の餓人を  
各々富貴で持室  
無てあかくは是非もなや  
多くの田畑ゆづるとも  
少しも田畑ゆづらねど  
我子の耳たふ薄ければ  
とかく其子の耳次第  
我子の繁昌折るなら  
人をたをしてもつ宝  
人の恨のかゝるもの

ゆつる子孫は沈ける  
 筆で非道に利を取な  
 あまり非道に利を取な  
 死て三途に入ことぞ  
 屋敷は草木生しける  
 非道は子孫の仇となる  
 世間に数くある事そ  
 親か悪事をせぬゆへそ  
 悪ひ風をも厭ひしそ  
 親をおもはぬおろかさよ  
 罵やからすにことならず  
 親の後生のためとせよ  
 おしまぬ金があるものそ  
 其金出して施行して  
 是にましたる善事なし  
 死で身に付ものほなし  
 捨て冥途のたひ立ぞ  
 耳もきこへず目も見へす  
 暗き闇路にいる事そ  
 後悔する事限りなし  
 菩提の種をまき玉へ  
 露の命といひまする  
 終に死病と成もあり  
 暮に頓死をするもあり  
 明日はわが身の葬礼ぞ  
 金銀たくはへ何にする  
 貧者に施しせらるへし

升や秤やそろばんや  
 貸金商売する人も  
 余り非道をする人は  
 其身は三途におち入て  
 縦くさきははへすとも  
 親の悪事か子に酬ひ  
 各栄花をする事は  
 親の悪きて子を思ふ  
 夫程親におもはれて  
 親におろかな人くは  
 親ある人も施行して  
 娘や孫を仕つけるに  
 親の後生の為ならば  
 餓死人をたすけなは  
 たとひ万宝長者ても  
 妻も子共も銭金も  
 冥途の旅立する時は  
 行衛もしれず門を出  
 其時悪種か身に積で  
 とかく命のあるかぎり  
 命はもろきものなれば  
 今夜頭痛かしはじめて  
 朝に喧嘩するひとか  
 今日他人の葬礼し  
 しかれば頼の無娑婆に  
 各富貴をさいわひに  
 貧者に施しせぬ人は

富貴にくらす甲斐もなし  
 餓死ぬ貧者を救ふへし  
 親や自身の御祈禱そ  
 天魔外道も近付す  
 能く了簡せらるへし  
 恵み施しならぬとは  
 慈悲善根のなき人は  
 宝にかぎりはなきものぞ  
 それがまことの信心ぞ  
 実もおもひ企て、  
 吾も我もと共く、に  
 貧者の命をすくふ故  
 今生貧者に敬はれ  
 貧者にあはれみ施して  
 施しきらふて屋中に  
 今日乞食をする人は  
 人の喰わけすつる物  
 前世に蒔種たらぬゆへ  
 か、る有さま見なからも  
 兎にも角にも人として  
 此節仁心おこらねは  
 妻子珠寶及王位  
 唯戒及施不放棄  
 財法二施  
 檀波羅密  
 南無布施修行不惜身命財  
 釈迦因地菩薩摩訶薩

犬でも口はすくるそや  
 慈悲善根は其ま、に  
 神や仏に守られて  
 然れば祈禱に成まひか  
 よく了簡しきはめて  
 余り胴慾目にある  
 子孫はんじやう長からず  
 施行て借金仕はしめよ  
 栄耀の施行に勝るそや  
 頭達たるひとくは  
 厚く施行に実を入れて  
 自身の善事は限なし  
 子孫はんじやうするものそ  
 身にとる果報は有まひか  
 門戸を閉るがよひ事か  
 何しに好て仕はせぬそ  
 貰ひて喰ふ輩は  
 是非なくほいとす事そ  
 各ふびんはおこらぬか  
 仁心なければ人てなし  
 全く牛馬にことならず  
 臨命終時不随者  
 今世後世為伴侶  
 功德無量  
 具足円満

- ※1 鈍なる人はみなひんぞ (丙)
- ※2 夫ゆへ釈迦も諸菩薩も (乙)
- ※3 屋敷は草木生しげる (丙)
- ※4 親悪事をせぬゆへぞ (丙)
- ※5 親の悪事で子をおもふ (丙)
- ※6 親をおもはぬおろかさ (乙)
- ※7 其時悪種が身に積て (丙)
- ※8 菩提の種をまきたまひ (丙)
- ※9 暮に頓死するもあり (丙)
- ※10 富貴にくらせし甲斐もなし (丙)
- ※11 是非なくほあとをする事ぞ (丙)
- ※12 この句以下なし (丙)
- ※13 この句に次いで「今の日も命の内に暮にけりあすもや  
きかん入相のかね」という和歌一首を掲げ、「財法二  
施」以下なし (乙)

〔Ⅱ類〕の甲と乙は基本的にほぼ同種の本文を持つが、これは〔Ⅰ類〕丙の二二六句の本文ともっとも近く、それを増補して刊行されたことは、ほぼ間違いない。この増補はおそらく円通翁なる人物によってなされたものと思われる。〔Ⅱ類〕系諸本の特徴のひとつとして、本文に先立って「円通翁補刻」の文言が入っていることがあげられる (但し、丙を除く) が、ここから増補者の名が判明するわけである。

次に、〔Ⅱ類〕甲、乙、丙の構成について確認しておく。まず、甲の構成を①をもとに左に掲出する。

(1)表紙 (仮綴本で本文料紙と同じ楮紙の中央に  囲みで外題「白隠和尚荒年施行歌」〈直刷〉とあり)

(2)本文 (端作「白隠和尚荒年施行歌、円通翁補刻」とあり、前掲一五八句と漢文)

(3)刊記 (「右江戸白木屋施印写」「天保二辛卯年正月」「取次所鶴岡三日町子屋門吉」)

甲のうち管見に及んだ②、④、⑤には(3)刊記はない。次に乙の構成を同様に掲出する。

(1)表紙 (色付き厚表紙、外題「増補心要善悪種時鏡和讃 全」〈題簽〉)

(2)表紙見返し扉 (中心に「心」字を置く蓮華花卉一枚形の十界図、上部に「こ、ろこそ心迷はずこ、ろなれこ、ろにこ、ろ

心ゆるすな」という道歌一首)

(3)本文 (各端作「一休大禪師施行歌、円通翁補刻」「沢庵和尚法語」「閑通和尚法語」「教訓百首」)

(4)刊記 (「東都書肆 須原屋茂兵衛 山城屋佐兵衛 小林新兵衛 須原屋佐助 和泉屋吉兵衛 岡田屋嘉七 平野屋平助 出雲寺万次郎 和泉屋金右衛門 須原屋伊八 英文蔵 本石町十軒店角腕屋伊兵衛」)

続いて丙の構成を掲出する。

(1)表紙 (色付き厚表紙、外題「白隠和尚施行歌」〈直刷〉)

(2)本文 (前掲一五八句)

(3)跋文 (「今般拙僧儀本尊薬師如来宮殿建立之志願に候併自力二難及依之十方有心之助力を請成就致度希もの也」)

(4)刊記 (「文化四年丁卯十二月日 別所大湯薬師堂 梅点」)

以上、〔Ⅱ類〕甲、乙、丙の構成を具体的に見たが、三者に共通するのはその本文である。また、うち甲と乙は「円通翁補刻」という文言を持つ点も共通している。〔Ⅱ類〕の特徴で特に言及すべき点は甲の外題が「白隠和尚荒年施行歌」とされる点に他ならない。これは〔Ⅰ類〕系諸本が共通して外題を「白隠禪師施行歌」とする

ことと対応している。一方、「Ⅰ類」のような挿絵は「Ⅱ類」では甲、乙、丙ともない。なお、乙で外題を「増補善悪種蒔鏡和讃 全」とすることや、「施行歌」の端作を「一休大禪師施行歌」とする（自撰）ことなどについては別に改めて考えたいと思う。

五 「Ⅲ類」系諸本について

『施行歌』のうち「Ⅲ類」とした諸本の本文は、「Ⅰ類」及び「Ⅱ類」より短章の二二〇句である。管見に入ったすべての諸本のうち最古本である甲①駒沢大学一八〇一三一一本を底本として左に翻刻する。翻刻に際しては第三章の「Ⅰ類」本文の翻刻の凡例に従う。

〔本文翻刻〕

今生富貴する人は  
今生施しせぬ人は  
利口で富貴がなるならば  
どんでも富貴するを見よ  
此世は前生の種しだい  
富貴に大小ある事は  
貧者に大小ある事は  
善悪二つに蒔種は  
田島に麦稗まかざれば  
麦稗少しまきおけば  
しかれば少しの施しも  
いはんや施し多ければ  
夫ゆへ御釈迦も観音も  
仏や菩薩の進なら

前世に蒔く種ゆへぞ  
後世きはめて貧乏ぞ  
どんなる人はみな貧か  
利口で貧乏するもあり  
未来は此世のたね次第  
蒔たね大小あるゆへぞ  
非道に大小あるゆへぞ  
盛衰二つに萌わかる  
穀物取たるためしなし  
五升や壹斗は実なり  
果報は倍く有物ぞ  
果報も多しと思ふべし  
施しせよとのすゝめ也  
よしある事ぞと思ふべし

さすれば今歳の飢人を  
おの／＼富貴で持宝  
多の田島をゆづるとも  
少しも田島はゆづらねど  
我子の耳たぶ薄ければ  
我子の耳たぶ厚ければ  
親の望でゆくものか  
ちから一つはい施行せよ  
我子にゆづりて怨となる  
升や秤やそろばんや  
筆で非道をしたまふな  
死んで三途に入る事ぞ  
やしきは草木がおひしげる  
非道は子孫の怨となる  
貧者に施しせらるべし  
富貴でくらす甲斐はなし  
飢死ぬ貧者を見ぬふりで  
貧者に施しする人を  
神やほとけに恵まれば  
しかれば折袴になる事よ  
よく／＼了簡しきはめて  
親の心で子をおもふ  
それほど親に思はれて  
鶯からすにもおとりたり  
親の後生のためにせよ  
娘息子をしつけるに  
そのかわりぞと施行せよ

救ふ心をおこすべし  
あれば有ほどたらぬ物  
もつ子が持ねばもてぬ物  
もつ子があつばれもつものぞ  
有田島売切る者も有  
無ひ田島もとめて持も有  
我子の繁昌祈るなら  
慈悲をせずして持金は  
人の恨みのかゝるもの  
貸しかね商内する人は  
筆で非道をする人は  
其身は三途におち入て  
たとひ草木ははへずとも  
おの／＼富貴をさいわいに  
貧者に施しせぬ人は  
犬でも口はすぎるぞや  
くらす心は鬼神よ  
神も仏もめぐみけり  
天魔外道はちかづかず  
是をよく／＼了簡し  
恵施し為玉へよ  
あらひ風にもいとひしぞ  
親を思はぬ人々は  
親ある人も施行して  
是ぞ真の孝行よ  
おしまぬ宝がたらぬ物  
直に我子の折袴なり

それにましたる善事なし  
死んで身に付ものはない  
捨て迷途のたび立ぞ  
耳も聞へず目も見へず  
くらき冥途に入事ぞ  
後悔する事限りなし  
菩提のたねを植玉へ  
露の命といひもする  
ついに死病になるも有  
暮に頓死をするも有  
あすは我身の葬礼ぞ  
いつ迄生る心ぞや  
なんじやし好んでする物か  
このんでらふ人はない  
是非なく袖乞する事ぞ  
おのゝ不便はおこらぬか  
又未だも相応に  
あつく施行に身を入よ  
我日本の八百万

※1 ひん者大小あることは(乙)

〔Ⅲ類〕乙の松ヶ岡文庫ハ一〇七本は一見させていたのだが、  
厳密な本文調査が出来ていないため、調査を進めて行くと異同箇所  
が他にも指摘できるものと思われる。甲の諸本は本文部分は同一の  
版木を流用しており、相違は序・跋の有無や、刊記といった前後部  
分だけに求められる。  
以下、〔Ⅰ類〕、〔Ⅱ類〕と同様に、構成を掲げる。甲①は次の

たとひ万貫長者でも  
妻も子供も銭金も  
めいどの旅立する時は  
行さきしらすたどり出  
其時くるしみ身につんで  
とかく命のあるかぎり  
命はもろきものなれば  
今宵頭痛がしはじめて  
朝はけんくわをせし人が  
けふは他人の葬礼し  
しかればたのみない娑婆に  
けふ乞食をする人は  
人の喰わけすてる物  
前世にまくたねたらぬ故  
かゝるありさま見ながらも  
かしら立たる人々も  
我もくともく人に  
功德を積は此時ぞ  
神の心にかなふべし

ような構成をとる。

(1)表紙、刊記(仮綴本で本文料紙と同じ楮紙の中央やや右寄りに「此施行歌は先年飢饉の時の作也」とし、さらにその左に「天明四年 辰二月下旬 施印」とある)

(2)本文(端作「白隠和尚施行歌」、前掲二〇〇句)

この甲①をもっとも似た形で継承したのは、甲⑤、⑥である。(1)表紙から「此施行歌は先年飢饉の時の作也」と刊記を取り除いて、外題のみとし、末尾に本文に続けて、「此施行歌……」をそのまま掲げた後に「天保十五年 辰三月下旬 施印」とする。天保十五年(一八四四)は、天明四年(一七八四)から六十年後の還暦に当たるので、その記念にでも再版されたものであろうか。また、甲②は次のような構成をとる。

(1)表紙(色付き厚表紙、外題「白隠和尚施行歌施印」(題簽))

(2)序(或日松川氏来り。往年の饑饉に。白隠和尚衆人に示し

給ふ書にて。我人隔なき詔を説。飢たるを助け。窮するを救て。人々天恩を報ずるに。便りなる書なれば。是を彫刻し。世に広くせんといへり。熱是を見はべるに。布施の行を専らにいへり。布施の行は慈悲心より起れば。吾仁義の道も外ならず。是容易事にはあらず。固有の本心を知て。人慾に克。我なき道理をするときは。世の人皆吾同胞なる理をしり。天下の疲。癘。残疾。惇独。鰥寡も。吾兄弟の顛連而無告者なりとおもへば。施行の志も起るべし。世に施行をなす人。多く名聞の爲にして。人にしられざればなす人なし。白隠和尚は。人々常に。此志しあらん事をしめしたまへば。見る人信心を起し。固有の本心を知るときは。和尚のこゝろもしるべ

し。我老翁の志の厚きを見て。爰に手嶋先生の歌を以て。端書すと云ふ。せちで金をば持ても慈悲で人をすくはねばかねのばん 尉と姥の贅に尉は天姥は地なり其中に生れし物はみな子孫なり なせはなるななねばならず成るものをならんといふはなさんなりけり 静安舎小谷重之識

(3) 本文(端作)「白隠和尚施行歌」、前掲二二〇句

(4) 刊記(「文化九壬 甲午冬霜月 施主何某」)

この甲②は心学者で手嶋堵庵の弟子筋にあたる静安舎小谷重之なる人物が序文を寄せている点に注意される。これは前述の「I類」乙と軌を一にし、『施行歌』が心学の方面からも尊重され、広く読者を得たことを示している。

一方、甲③と④は次のような構成となる。後補のない③による。

(1) 表紙(色付き厚表紙、外題「白隠和尚施行歌施印」〈題簽〉)

(2) 本文(端作「白隠和尚施行歌」、前掲二二〇句)

(3) 跋(「語に云く淵に臨みて魚をねらふは退て網を結ぶにしかずと味あるのことは己が富貴ならんことを願はゞ先貧なる者をめぐむべし心の樂しからんことを求めば人のくるしみを救ふべし子孫の孝養を望まばあつく先祖を祭るべし田ありといへども種を時ずば穀物を得べからずこれ理の常にして疑ふべきにあらず世の人衆みを求めざるはなく富貴を願はざるもなく子孫の孝行を悦ばざるもなし然れども慈親に孝をつくす者まれに他を憐むの心うすく施を好む者すくなし是誠にと田地を荒して穀物を望み網をすて、魚を羨むにあらずやよく此理に達せば人世の果報のみならず高く菩薩の道にかなひて遂に仏果を成せんこと難きにあらず白隠禪師の施行歌其詞いやしといへどもその心したしくその理明かなり此をよめば昔日みづから施を勤め給ふ和尚の面目をみるがごとし能この歌の意

を得て善を勤むる人あらば今日したしく和尚に相見するといふも可なり いか斗うれしからまし聞ま、におこなふ人のある世なりせは 浪華の善士糸川成富翁施行歌を印施し人を善に導んとする一片の婆心に感じ随喜の一言を陳んと筆を執て覚へず長語をなせり 文政五年壬午の仲秋百濟山長栄寺 比丘拙菴老人識 卍 卍)

〔Ⅲ類〕系諸本の中には「I類」と同様、木版一枚物が存在している。乙の松ヶ岡文庫八一〇七本がこれにあたるが、その構成を次に提出する。

(1) 冒頭表題(「白隠和尚施行歌施印」)

(2) 本文(二二〇句)

(3) 跋(「因に云天地万物を生ず神仏は其万物を恵を以て心とし玉ふ人万物の長たるゆへ親としては子をいつくしみ子は親を愛したふは天性なり然るにむかし片田舎のおろかに貧きものかつは米こく高直の年がらなどには心得違ふて子をおろすもありとかや或は親はらからに忍て密通し孕るものおのれが不義を掩わんとて是又子をおろしなどいづれも誠につみふかき業なり聖人は仁をそこなふ者はとりけものに近しと宣へり又仏も殺生を深くいましめたまへり然るにかゝる殺生をなすものは現世では神仏に見かざられさいわいさんじ災にひきたり未來は永劫ぐれん大孔蓮の地ごくにだざいし更に浮ぶ世あるべからず実に恐ても尚おそるべし〜」)

以上、「Ⅲ類」系諸本はその本文が二二〇句であり、外題を「白隠和尚施行歌」とする点に共通した特徴を持つ。また、「Ⅱ類」系諸本と同様に挿絵を持たないことも「I類」とは異なる点と言える。

六 (IV類) 本について

玉川大学B本は基本的には「I類」系本文によりながら、末尾部分に「III類」系本文を採用するという他に例のない二二八句からなっている。第三章「I類」本文の翻刻の凡例に倣い、左に翻刻する。

〔本文翻刻〕

今生富貴する人は  
今生施しせぬ人は  
利口で富貴がなるならば  
利口で貧乏するをみよ  
未来は此世の種次第  
蒔種大小あるゆへぞ  
よき種ゑらんでまき給へ  
穀物取たるためしなし  
麦ひへ取たるためしなし  
五升や壹斗はみのるぞや  
果報は倍々あるものぞ  
果報も多しと斗り知れ  
施しせよとす、めたり  
救ふ心をおこすべし  
あれば有ほどたらぬもの  
持子が持ねば持ぬもの  
持子はあつばれ持ものぞ  
人を倒さず施行せよ  
我子に譲りて怨となる  
ゆづる我子がしづみきる

前世に蒔おく種がある  
未来はきはめて貧なるぞ  
鈍なる人はみな貧か  
此世は前世の種しだい  
富貴に大小ある事は  
この世はわづかの物なれば  
種を惜みてうへざれば  
田畑に麦稗蒔ずして  
むぎひへ少々まきおけば  
然れば少しのほどこしも  
況や施し多ければ  
夫ゆゑお釈迦も観音も  
さすれば乞食非人まで  
おのゝ富貴で持たから  
多くの宝をゆづるとも  
少しも田畑を譲らねど  
我子の繁昌祈るなら  
人を倒して持たから  
人の恨のかゝるもの  
舛や秤やそろばんや

筆の非道をし給ふな  
あまり非道な利をとるな  
其身は三途に落入て  
非道は子孫の害と成  
世間に数々有ものぞ  
親が悪事をせぬ故そ  
ますゝ重恩おもひしれ  
あらひ風をも厭ひしぞ  
おやを思はぬおろかさよ  
鶯や鳥におとりたり  
惜む宝はなきものぞ  
其金出して施行せよ  
是に勝れる善事なし  
死んで身につく物はなし  
捨て冥途の旅立ぞ  
耳もきこへず目も見へず  
闇をやみちに入事ぞ  
兎角命のあるかぎり  
命は脆きものなれば  
今宵頭痛が仕初めて  
強い自慢をする人も  
今日は他人を葬れし  
然れば頼みなき娑婆に  
富貴さひわいある人は  
貧者に施しせぬ人は  
狗でも口はすぐるぞや  
慈悲善根は其まゝに

常々商ひする人も  
死んで三途に入ことぞ  
屋敷は草木が生しげる  
親の悪事が身にむくふ  
一門繁昌することは  
若又親にはなれなば  
子をいつくしむ親ごゝろ  
それ程親に思はれて  
親に不孝な人々は  
娘むすこをしつけるに  
親の後生のためならば  
飢死ぬ人を助けなば  
たとひ万貫長者でも  
妻も子供も銭金も  
冥途の旅立する時は  
行衛しらずに門をいで  
其時後悔限りなし  
菩提の種をうへ給へ  
露の命と名付たり  
九死一生なるもあり  
暮に頓死をするもあり  
明日は我身の葬れぞ  
金銀たくわへ何にする  
貧者に施しせらるべし  
富貴でくらすかひもなし  
飢人貧者を助くべし  
家繁昌の御祈祷ぞ

慈悲善根をする人は  
天魔外道はより付ず  
よくく了簡せらるべし  
余りどうよく目にあまる  
暮すこ、ろは鬼神か  
子孫はんじやう長からじ  
施行で借錢し初めよ  
上たる人をはじめとし  
われもくともくくに  
貧者の命をすくふなら  
平生貧者にうやまはれ  
人の喰物すつるのを  
前世にまく種たらぬ故  
か、る有様見ながらも  
上たる人も末くも  
あつく施行に身を入よ  
我日本の八百万

神や仏に守られて  
然れば祈禱になるまいか  
恵み施しならぬとは  
飢死ぬ貧者を見ぬ振に  
慈悲善根のなき人は  
宝に余りはなき物ぞ  
それこそ真の信心よ  
頭だちたる人くは  
あつく施行に身を入よ  
廣大無辺の善事なり  
身に付果報有まいか  
好んで捨ふてくう物は  
是非なく袖乞する事ぞ  
おのく不便は起らぬか  
我もくともくくに  
功德をつむは此時ぞ  
神のこ、ろにかなふべし

この本は、その形態から見て〔Ⅰ類〕丙をもとにしてゐることは疑いがない（中でも外題等と同じくする③と密接な関係がある）。本文は具体的には、冒頭の「今生富貴する人は」から第一二二句目の「おのく不便は起らぬか」までは、三箇所の異同を除いて〔Ⅰ類〕丙と共通する。しかし、一二三句目以下末尾二二八句までの都合六句を「上たる人も末くも 我もくともくくに あつく施行に身を入よ 功德をつむは此時ぞ 我日本の八百万 神のこ、ろにかなふべし」とするのである。この六句の本文は、〔Ⅲ類〕の末尾と共通しており、〔Ⅰ類〕と〔Ⅲ類〕の折衷例として注目される。

次に、〔Ⅳ類〕本の構成を掲げる。

- (1) 表紙（色付き厚表紙、外題「孝行和讃 因果和讃 全」〈題簽〉）
- (2) 表紙見返し（「西国卅三所観音霊場記図会 五冊」の広告、板元は京三条通柳馬場角の堺屋仁兵衛）
- (3) 本文（各端作「孝行和讃 宣契上人作」「因果和讃」「施行歌 白隠禅師作」「ほこりた、き 白隠禅師作」）
- (4) 跋文他（「損替助刻 押小路通政郡士 釜屋通清水氏 西洞院通酒井氏 湖東望月氏 堀川通杉野氏 五条橋通西湯浅氏 三条通高木氏 東洞院通高橋氏 三条通松尾氏」「万物の長たる人と生れて人倫の行ひなきは禽獸に劣れり以上の書は現当三二世の教いと懇にして論し易し此本を得玉ふ人々捨置ずして朝夕家業の隙には家内え読せもし読聞せもし給はゞ自ら家内和合子孫昌久の祈禱となる事疑ふべからず依而今度同志に資を乞ひ永く梓に寿す願はくば我人の隔なく共に悪をこらし善事にす、まじめ給はん事を裁ふ」）

以上の〔Ⅳ類〕も、もとした〔Ⅰ類〕丙と同様に挿絵を持たない。(5) 刊記（「安政五年午夏 平安 桜井匡直謹白」）

## 七 「Ⅴ類」の存在の可能性

以上、管見に入った江戸期の板本、写本をもとに「施行歌」諸本を〔Ⅰ類〕、〔Ⅱ類〕、〔Ⅲ類〕、〔Ⅳ類〕に分類し、それぞれの本文や構成について報告してきた。前述したように、明治以降活字本として出版された「施行歌」の圧倒的多数は〔Ⅰ類〕甲によつてゐるのであるが、ここに一種だけ〔Ⅰ類〕、〔Ⅱ類〕、〔Ⅲ類〕、〔Ⅳ類〕のいずれにも属さない本文を持つものが存在する。それは「国民思想叢書」文芸篇（昭和7年、大東出版社刊）所収の「施行歌」

で次のような一一九句の本文が掲載されている。

〔本文転載〕

今生富貴なる人は  
今生施しせぬ人は  
利口で富貴がなるならば  
利根で貧乏するを見よ  
富貴に大小ある事は  
此世はわづかなものなれば  
種を惜みて植へざれば  
田畑に麦稗まかずして  
種物一升蒔き置けば  
然れば少しの施しも  
況んや施し広ければ  
神も仏もそれ故に  
さすれば乞食非人まで  
各々富貴で持つ宝  
多くの宝ゆづるとも  
少しの田地ゆづらねど  
子孫繁昌祈るなら  
賄賂高利掠り取  
他の恨みを取溜めて  
升や秤や算盤の  
士農工商其外も  
死ねば三途に落入て  
非義は子孫の害となる  
世間の数々あるを見よ

前世に蒔置く種がある  
未来は極めて貧なるぞ  
鈍なる人は皆貧か  
此世は前世の種次第  
蒔く種大小ある故ぞ  
善き種選んで蒔き玉へ  
穀物取りたる例しなし  
実のりを取りたる事はなし  
五升や一斗は実のるぞや  
果報は倍々あるものぞ  
果報も多しとはかり知れ  
慈悲善根を勧めたり  
救ふ心を発すべし  
あればあるほど足らぬもの  
持つ子が持たねばもたぬもの  
持つ子は天晴れ金持ぞ  
人を倒さず施行せよ  
後の歎きの種となる  
譲る我が子が沈みきる  
筆の非道ぞ身に報ふ  
少しも無理な利を取るな  
屋敷宝は人の物  
親の悪事が身に報ふ  
一門繁昌する事は

先祖の慈悲の残る奴  
仁情の油を加ふべし  
離れば倍々思ひ知れ  
荒い風をも厭ひしぞ  
親を思はぬ悪人は  
娘子息をしつけるに  
親の後生の為ならば  
飢死ぬ人を助けなば  
たとへ万兩分限でも  
妻子宝も振り捨て、  
耳も聞はず目も見へず  
果なき闇に落入らん  
兎角命のある限り  
命は脆きものなれば  
強い自慢をする人も  
然れば頼みのなき憂世  
少しも余りある人は  
取分け病人かたわ者  
難儀と聞かば尋ねても  
されば菩薩の修行にも  
難儀を余所に聞く人は  
果報尽くれば忽ちに  
慈悲心深き心がけ  
天魔に邪鬼はより附かず  
飢饉貧苦を見ぬふりに  
余り強欲目にあまる  
宝に余りはなきものぞ

慈悲の燈火消ぬうち  
主親師匠恩人に  
子を慈しむ親心  
夫れ程親に思はれて  
鳥獸にも劣りたり  
惜む宝はなきものぞ  
其金出して施行せよ  
是に勝れる善事なし  
死んで身につく物はなし  
冥途の旅立する時は  
行衛知らずに門を出で  
其時後悔限りなく  
菩提の種を植えたまへ  
草葉の露にたとへたり  
暮に頓死するものあり  
金銀貯へ何とする  
貧苦に施しせらるべし  
みなし子老人便りなき  
及ぶ限りは救ふべし  
放生施行ぞ大悲なり  
富貴で暮す甲斐もなし  
貧病災難苦にせまる  
神や仏が守る故  
然れば至極の祈禱なり  
慳貪邪見は鬼か蛇か  
子孫滅亡待つばかり  
施行に借錢し初めよ

やがて子孫の富める種

他も勤めて丹誠し

広大無辺の善事にて

人の喰ふ物捨つるのを

前世に蒔く種足らぬ故

か、る有様見ながらも

今世に信心おこらねば

慈悲陰徳の実の日は

長命富貴子孫繁昌

上なる人も頭ぶん

厚きめぐみに身を入れよ

徳運果報開くべし

尋ねて拾ひ喰ふ者は

是非なく袖乞することぞ

種を蒔かず居喰して

生々永き苦みぞ

開運菩提の花咲きて

左に掲出した『国民思想叢書』文芸篇所収の『施行歌』が何を底本とし、あるいはまた何に基づいているのかはまったく不明である。しかし、それが同本編者の創作的改変である可能性は低いものと思われる以上、仮りにこの本文が江戸期の伝本に遡ることができると想定すれば、これに〔V類〕の名を与えなければならないであろう。今後の調査が俟たれるところである。

#### おわりに

以上、白隠慧鶴の『施行歌』の江戸期の伝本の諸相について述べてきたが、ここから導かれるべき最大の結論は、どの本文が白隠の創作した原形にもっとも近いかという点であろう。前述してきたように、おそらく〔I類〕甲が原形をもっともよく留めていると思われるが、残念ながら確定的なことはわからない。極端に考えれば「四通翁補刻」とする〔II類〕も含めて白隠自身がすべての増補・削除等の改変にかかわっていると、また逆に、すべて後代の人が白隠に仮託して創作改変したものとも言えなくはないのである。

一方、本稿によって明らかにし得たことは『施行歌』の多様な享受と広範な流布の様相に他ならない。享受の多様性は心学者を巻き込んだ出版状況に端的に示されているであろう。流布の広範性は伝本の多さがものを語る。『施行歌』は総体として人気であった白隠著作の中でも一、二を争う程、多くの版を重ね、また多種の版も生んだのである。

最後に言及しておきたいのは、『施行歌』が飢饉の際の貧者への施行を勧めることをテーマとしているにもかかわらず「子を慈しむ親ご、ろ 荒ひ風をも厭ひしぞ それ程親に思はれて 親を思はぬおろかさよ おやに不孝な人々は 鶯や鳥に劣りたり」(〔I類〕甲①の本文による)と親孝行を強調する点である。これは藤田徳太郎が「教化民謡」と呼んだ近世民謡最大の特徴に位置付けられるものであり、他に多くの類例を指摘できる。白隠『施行歌』は七(八)・五の句を繰り返す和讃の形式を採用している。和讃の形式による『施行歌』は広義の近世民謡に含めてよいものである。江戸期を代表するもうひとりの禅僧、盤珪水琢が創作したとされる「うすひき歌」、及び盤珪の説法をもとに懶石が創作したとされる「麦春歌」等の歌謡にも親孝行を説くものが多く、教義上対立する二人の歌謡にこの教訓が共通して見えることは興味深い。ともに近世という大きな時代精神が生んだ申し子であったと言える。

白隠『施行歌』の研究はまだ端緒にいたばかりである。今後の新展開が切に望まれよう。

#### 〔註〕

- (1) 雲泉文庫本二本をその刊行年代の古い順にA本、B本と私に呼ぶ。  
 (2) 架蔵本四本をその刊行年代の古い順にA本、B本、C本、D本と私に

呼ぶ。

- (3) 同本には「取次所」とある。
- (4) 玉川大学本二本をその刊行年代の古い順にA本、B本と私に呼ぶ。
- (5) 改題本の「高僧名著選集」第十一巻もまったく同一本文。
- (6) 但し、後述するように「国民思想叢書」文芸篇「教訓俚謡集」所収「施行歌」のみが本文に大きな異同を持つ。
- (7) 印面は上のものが白文で「籬島」、下のものが黒文で「湘夕」とある。これら四種の本にはそれぞれ内容を要約した広告文が彫られている。ちなみに「白隠禪師施行歌 全」には「此書は禪師の作にして國中をめぐり窮民をすくふ一助とし玉ふ歌にしていとありがたき書也」という文が寄せられている。
- (9) 甲を踏襲した絵であるが、甲と比較して、土地の人の着衣が立派なものに変えられている。
- (10) 印面は甲本と同じで、上が白文で「籬島」、下が黒文で「湘夕」と依拠したものをそのままに残している。
- (11) 乙の四葉の絵のうち三葉までが甲の絵と近似する。「写真Ⅶ」は「写真Ⅲ」を、「写真Ⅷ」は「写真Ⅴ」を、「写真Ⅷ」は「写真Ⅳ」をもとにしていることがわかる。
- (12) 本文は一二六句で末尾に「施行歌終」とある。挿絵なし。
- (13) 本文は一二七句。乙本系統の本文を伝える。
- (14) この点については、拙稿「近世歌謡資料二種——絵本倭詩経——」和河わらんべうた——」（『早稲田実業学校研究紀要』第二十号（昭和61年3月））の中で簡単に言及した。なお、手嶋堵庵の道歌と伝えられるものに「金銀もかせずつかはずほどこさずかさねておけば石も同ぜん」（架蔵『教訓古今道しるべ』〈天保八年秋刊〉所収）があり、「施行歌」との思想的接点が見受けられる。
- (15) 本文は一五八句と漢文。前掲の校異を参照。

(16) 『新撰書籍目録』では書肆の出版年代から文政頃の刊行と判断する。従うべきであろう。

(17) 印面は上のものが黒文で「長栄寺主」、下のものが白文で「拙菴之印」とある。

(18) 第三二句目は「I類」丙では「少しも田畑ゆづらねど」であるが、「IV類」では「少しも田畑を譲らねど」、第六五句目は「I類」丙で「是に勝れる善事なし」、(「IV類」では「是に勝れる善事なし」、第一二三句目は「I類」丙では「貧者の命救ふなら」、(「IV類」では「貧者の命をすくふなら」とそれぞれ異同が認められる。

(19) 『日本民謡論』所収「江戸時代の教化民謡」。なお、前掲のように武石彰夫も同様の言及をする。

#### 〔附記〕

「施行歌」諸本を閲覧させていただきました諸図書館、文庫に深謝申し上げます。中でも松ヶ岡文庫では文庫長古田紹欽先生に一方ならぬお世話になりました。また、貴重な図書の翻刻紹介の御許可を賜りました駒沢大学図書館、玉川大学図書館に心より御礼申し上げます。

## A Study on “Segyou-uta” written by Hakuin Ekaku

Mitsuyasu ONO

*Department of Japanese and Japanese Literature,  
Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582, Japan.*

The biggest character of Kinsei-minyou (folk songs in the Edo era) is the moral words of songs. Most of the folk songs preach children duty to their parents. It has been understood that the content of these songs was influenced by Confucian moral, but the majority of the folk songs were written from the viewpoint of Zen in Buddhism and Singaku.

“Segyou-uta”, which was written by Hakuin Ekaku, is treated in this report. Hakuin was a Zen priest in the Edo era.

At first, I studied the books of “Segyou-uta” as a basic research. As a result, it was found that they can be classified into four divisions. I report the text of each division, and try to compare and investigate them.

**Key Words;** Hakuin, “Segyou-uta”, the folk songs in the Edo era, the books of “Segyou-uta”, moral,